

アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解 ——メソディズム，労働組合運動，フェビアニズム

鎌 田 大 資*

Ernest W. Burgess' PhD. Dissertation and His Understanding of the Socialism
in the 19th Century:
Methodism, Trade Unionism and Fabianism

Daisuke KAMADA

初期シカゴ学派社会学の指導的研究者の一人、アーネスト・バージェスが学問の形成期に何を摂取し、どのように19世紀からの社会学や社会主義の遺産を組み立て直そうとしたかを知るため、彼の博士論文（Burgess 1916）の概要を検討した前稿（鎌田 2016）に引きつづき、本論ではその細部にかかわる考察に進む。バージェスはこの博士論文で、「社会化」概念を当時の「土地、資産、産業の国有化、共有化」という意味から、現行の「社会規範を幼児や青年が内面化し吸収して十分に活用する力をつける」という意味に、移行させようとしていた。3部に分かれた論文中、歴史編に当たる第1、2部から、理論編である第3部に進む結び目の部分では、彼はフェビアニズムの労働運動史を援用しつつイギリスの政治的近代化の一側面を果敢に剔抉している。イギリス史を総括し、未来を見通す視点が「社会化」である。こうした点を検討する際の副産物として、フェビアニズムと革命後のロシアの政治的評価のつながりが浮かびあがり、赤狩り時代にバージェスに対しておこなわれた忠誠審査の実態についても考察できるようになる。エドガー・フーバー長官が率いたFBIによる社会学者たちへの捜査は、バージェスを含め、複数の社会学者を対象にしていた。バージェスは政治的にも穏健で、各種の社会的対応にも慎重であったと伝えられており、この件は彼の生涯を見わたす際の謎の一つともなっている。

1、バージェスの博士論文の一つの特徴——メソディズムと労働運動の関連づけ

第一次世界大戦前夜のフェビアン協会の政治綱領として、不労所得である地代（rent）の国有化という考えがある（Shaw & Wilshire [1889] 1891）。また1920年ごろのフェビアニズムの政治的提言をまとめた『大英社会主義コモンウェルスの構成』¹では、社会的に共同管理すべき諸産業、行政活動を一概に国有化するのではなく、市町村等の自治体単位に分割して管掌させ、国内で競争しながら改善していける体制を提案している（Webb & Webb 1920:203-246=1979:220-265）。バージェスやフェビアンたちにとっての「社会化」は、レーニンが描いた財産の没収、その後の社会での共有といった「社会化」を指しておらず、その意味にはかなり

*人間関係学科 准教授

の幅がある（レーニン 1975）。

フェビアン協会は中産階級以上の知識人の集まりであり、創立当初は労働組合に理解がなかった。熱心な政治活動家だった父の影響により労働組合運動に造詣が深く、官吏から政治家に転じたシドニー・ウェッブの加入などにより、彼らも徐々に労働組合活動の意義に理解を示すようになる。シドニーはさらに、社会進化論の提唱者ハーバート・スペンサーの姪で、チャールズ・ブースの貧困調査の有能なスタッフの一人であったビアトリス・ポッターを妻に迎え、労働組合運動に関しても統計データを踏まえた政策提言をおこなう団体として、フェビアン協会は変貌していった。ボーア戦争などの際にはイギリスの帝国主義的植民地経営を支持しており、国際共産主義運動のなかでは右派に属する立場である。中道的浸透主義を採用し、自宅サロンなどに有力政治家を招待し、議論による合理的な説得を繰り返して国の指導層と親交を深めつつ、社会主義的政策をもちこむ社会変革を実現しようとした。

労働者に関する最低生活ラインへと読みかえられていく貧困線の研究から国民的最低限（national minimum）の概念が生まれ、労働組合の成果としての生活保障が国民全体に押しおよぼされて生活保障、生活保護などの着想が生まれ、イギリスは福祉国家へと舵を切る。ウェッブ夫妻の著作は、アメリカや日本の社会保障制度の成立史上にも重要な意義をもつものと考えてよいだろう²。

表 1、フェビアン協会関連年譜（Cole [1931] 1937 など参照）およびウェッブ夫妻主要著作初出年³

- 1883 The Fellowship of the New Life から分かれて Thomas Davidson 教授の影響下に、
Frank Podmore, Edward R. Pease らでフェビアン協会結成
- 1884 George Bernard Shaw 加入
- 1885 Sidney Webb 加入
- 1887 *Fabian Essays* (Shaw & Wilshire [1889] 1891) 出版
- 1891 『英国協同組合運動』 (Potter 姓時代の Beatrice の単著) (Potter 1891=1921)
- 1892 Beatrice Potter が Sidney と結婚、Beatrice Webb となる
- 1894 『労働組合運動史』 (Webb & Webb [1894] 1911=1973)
- 1897 『産業民主制論』 (Webb & Webb [1897] 1902=[1927] 1969)
- 1911 『防貧策』 (Webb & Webb 1911a=1914)
- 1920 『大英社会主義コモンウェルスの構成』 (Webb & Webb 1920=1979)
- 1921 『消費組合運動』 (Webb & Webb 1921=1925)
- 1923 『資本主義文明の崩壊』 (Webb & Webb [1923] 1970=1928)
- 1932 『社会調査の方法』 (Webb & Webb [1932] 1975=1982)
- 1936 『ソヴィエト・コミュニズム』 (Webb & Webb 1936=1952-1953), 『ソヴィエト共産主義は新しい文化か』『ソヴィエト共産主義は独裁か民主制か』 (パンフレット) (Webb & Webb 1936a=1946; 1936b=1946)
- 1943 Beatrice Webb 死亡
- 1947 Sidney Webb 死亡

2, メソディズムと労働組合運動の発生に関連——バージェス博士論文の一節から

本論では、上記バージェスの博士論文から特に第 2 部 10 章「社会化の非個人的段階」(Burgess 1916:137-174) に着目し、初期シカゴ社会学やアメリカ社会学全体のなかでも特に微妙な論点について考察する。土地、産業の国有化という視点で社会化を扱った社会学者は、おそらくフェビンたち本人や、G・D・H・コールのような社会主義的著述家を社会学者としてカウントする場合を除けば、バージェス以外にはいないかもしれない。すなわち、アルビオン・スモール、チャールズ・ヘンダースン、ジョージ・ヴィンセントら、バージェスを指導した教員たちの議論においては、この概念は中心的な位置を占めていなかったということである。さらに労働組合運動におけるメソディストの巡回説教師の活躍を強調する点で、キリスト教社会学をはじめとするバージェス執筆当時のキリスト教と社会学、社会主義の関係の捉え方においても、彼の博士論文には特異な点がある。

バージェス博士論文の第 2 部「社会の進歩における社会化の役割」(Burgess 1916: 69-174) は古代から近代までのイギリス社会の発展をたどりつつ、社会主義的な「社会化」理念に到達するまでの過程を記述している。第 2 部は 4 章に分かれる。すなわち、第 7 章「社会化の血族的段階」(Burgess 1916:69-86)、第 8 章「社会化の個人的段階 その 1、封建的なタイプ」(Burgess 1916:87-108)、第 9 章「社会化の個人的段階 その 2、タウン・タイプ」(Burgess 1916:109-136)、第 10 章「社会化の非個人的段階」(Burgess 1916:137-174) である。

第 7 章「社会化の血族的段階」は古代からローマ時代まで、第 8 章「社会化の個人的段階その 1、封建的なタイプ」では、ローマ時代におけるキリスト教の受容からマグナ・カルタの成立までを描き、第 9 章「社会化の個人的段階 その 2、タウン・タイプ」では、宗教改革以降、オリヴァー・クロムウェルによるピューリタン革命までの動向をまとめている。

この時代には本論の主題となるメソディズムの発生的前提となる社会条件が生じているので、バージェスの記述を離れて簡単にイギリスの宗教状況を概観しておく。ルターによるプロテスタント会派の創設後、スイスに発生したカルヴァン派の影響を受けたピューリタンがイギリスにも増えつつある時代、国内の宗教闘争の結果、16 世紀にヘンリー 8 世により創始されたイギリス国教会が宗教的主流派として支配的な位置を占めていた。国教会はプロテスタントでありながらカトリック的な位階序列制が強く、聖職者叙任権を国家が掌握することを特徴とする。一方、カルヴァンの万人司祭説に依拠するカルヴァン派が、徐々に国教会の統制からはみ出すような布教活動を展開し、教勢を伸ばしはじめた。ピューリタン革命の中心人物、クロムウェルが率いるピューリタン軍の主力は実は国教会主流派とは距離を置く人々であった。都市部の上流階級を中心に依然として優勢な国教会の聖職者たちは、高教会 (high church) 派と呼ばれ、高い威信を誇る聖職者集団を形成していた (野呂 1991)。

第 10 章「社会化の非個人的段階」では、以下のような状況が背景にある。クロムウェルの死後、王政復古を遂げたチューダー王朝のジェームズ 2 世が、戦闘をおこなわずにオレンジ公ウィリアムとその妻メアリーに譲位して国外亡命した名誉革命を経て、国の象徴として君臨する王のもとで、民主主義の手続きに従う議会や内閣が立法や行政を担う立憲君主制が成立する。こうした背景のもとに国教会の高教会派と距離を置きつつ、独自の布教活動を進めるピューリタンに刺激され、イギリス発祥の新たな宗派として勢力を伸ばすメソディストを中心に生じた動向が論じられる。さらにナポレオンとの戦争を経験し、労働者のあいだにも高まっていく国民の自覚やナショナリズムの動向 (Burgess 1916:151-153)、およびデビッド・リカードの経済学説

を受けてカール・マルクスや労働組合の理論家が、社会主義の論調を形成していく様子も記述する (Burgess 1916:154-156)。

イギリス国教会の聖職者が任地にも出むかず都市で腐敗した放逸な生活を送るあいだに、18世紀半ばにはじまる産業革命の幕開けとともに開発され、資源の採掘が強化されていた炭鉱や工場街は、宗教的空白地帯となり、教会がないか、無牧の状態のところが増えていた (Beazley 1898:409-410)。そうした労働者階級の居住地帯にも布教をおこない、大会派に成長したメソヂストの運動についての記述がなされている。さらにメソヂストの巡回説教師から炭鉱における労働運動の組織者が生まれ、生活の互助運動が進められていった過程を、ウェッブ夫妻の『労働組合運動史』(Webb & Webb [1894] 1911=1977) など、数点の書物を引用して構成している。資本主義が発達した社会では労使の対立が激化し、労働者が蜂起し革命にいたり、社会主義、共産主義の社会に移行するというマルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによる予言 (Marx & Engels [1848] 2008=1971) を、どう評価するかによって、イギリスでの19世紀の歴史の諸相は、同一の現象でも評者により評価が異なる。ある場合には、メソヂズムもフェビアニズムも、資本主義が発達したイギリス社会において、ガス抜きとなって革命の発生を押しとどめた「民衆のアヘン」と見なされている。逆に、内戦による破壊と革命後の独裁的全体主義をもたらす騒擾の勃発を防ぎ、資本主義と民主主義の枠内での労働者の生活向上施策を模索する社会主義化、すなわち社会民主主義をもたらす社会の転轍機として、また民主主義の担い手である民衆が投票により代議員を選挙できる程度まで、社会的、政治的判断力を身につけていく国民教育の推進者として、肯定的な評価を与えられることもある⁴。バージェスは後者の観点からメソヂズムと労働組合運動の関係を記述し、肯定的に位置づけようとしている。しかし、そのために上記のような両様の価値観をめぐる整理をなし終わるには、少なくとも第二次世界大戦が終結し東西冷戦体制が定着するまでの、数十年という歳月が必要だったと考えられる。つまりバージェスが博士論文で披露した歴史的な判断と位置づけは、実は時期尚早な勇み足だったのである。とはいえ、東西冷戦の一翼をになったロシア共産党の独裁が終わりを告げ、中国型社会主義が資本主義的な生産性増大の方向に舵を切りつつある現在、この件に関するバージェスの考え方が、大方は正しいと見なしうる状況が、学問的、政治的に熟してきているともいえるだろう。

さて、そうした微妙な判断なしには読めないメソヂズム、労働組合運動、フェビアニズムの歴史的評価について、バージェス本人の記述と、彼がその証拠として挙げるいくつかの19世紀の著作の抜粋を見ながら検討してみよう。

清教徒の運動はおおむね中産階級の現象であり、経済的に上昇意欲のあるヨーマンや職人のモリーズ (mores) を、強調を与えられた形で示すものであった。それに対し、メソヂストの覚醒はほとんど労働者階級に限定され、また娯楽や贅沢に対するピューリタンの態度は保持しながら、経済的苦闘のさなかでの労働者たちの同盟に必要な、社交 (society) の感覚の暖かさを宗教に導入した。新たな指導者たちの訓練や労働者たちのあいだでの精神的覚醒は、労働組合や労働運動の社会的効率に向けられた諸力のなかでは無視しえないものである。メソヂズムの起源と初期の展開を簡単に概観することで、以上の論点は明確になることだろう。[改行] ウィクリフ (Wycliffe) 同様、ジョン・ウェスレーはオックスフォード出身者で、労働者階級のなかから自分に従うものを得ようとした。メソヂスト運動の真の意義は、第四身分 (the fourth estate) の宗教生活への積極的参加を指し

しめたという事実にある。(Burgess 1916:147-148)

この部分は、国教会が公式にイギリスの宗教状況を支配しているにもかかわらず、18 世紀から 19 世紀にかけてのメソディズムが興隆してきた様子について述べている。

このあと、ジェームズ・ロジャースの著作から、メソディストの成功は 18 世紀に入り、少し物価が下がり賃金が上がって、労働者階級が宗教活動に割く時間の余裕ができてきたためであろうという一節をバージェスは引用する (Burgess 1916:148; Rogers 1888:88)⁵。

さらに国教会の聖職者でありながらメソディズムに傾倒し、奴隷解放の論陣を張って名を残したウィリアム・ウィルバーフォースや、短い宗教的寓話のシリーズをパンフレットの印刷物にして、数百万部も流通させた流行作家であるハンナ・モアの評伝などにも言及して、メソディズムの社会的影響の大きさの傍証としている⁶ (Burgess 1916: 148-149; L.S. 1894, 1900)。

19 世紀のイギリスでメソディズムの勢いが盛んだったということに異論の余地はなく、それは歴史的事実として認められている。ところがバージェスはさらに進み、メソディズムの一分派であるプリミティブ・メソディスト (primitive methodist) と、労働組合運動の初期の組織者たちの関係について以下のように語ろうとする。

労働者階級のもっとも積極的で創造的な宗教生活への参加の例は、プリミティブ・メソディストの運動である。プリミティブ・メソディストの働きは貧困層のなかでおこなわれた。その指導者もまた労働者のなかから現れた。(Burgess 1916:149)

確かに現在のでは、プリミティブ・メソディストから初期の労働組合指導者が輩出する過程で働く社会的メカニズムの諸段階を、おおむね再構成できる程度に研究が進んでいる。しかしそれが文献にもとづいて歴史学的に立証されるのは 1930 年代の後半のことである。バージェスはいくつかの事例を集めて自説を立証できたように書いているが、引用された情報源を仔細に検討すると、この段階でバージェス自身の論旨を確認するに足る論証はなされてはおらず、彼自身が挙げる論拠も、多数存在する傍証というべき諸事実の集積である。

19 世紀後半から 20 世紀初頭においては、たとえばプリミティブ・メソディストの集団に参加して、普段の活動を観察するといった技法は開発されていない。志のあるジャーナリストによる身分を隠しての潜入取材はおこなわれていたが、そうしたデータもこのプリミティブ・メソディストの団に関しては存在しなかった。以下に引用するバージェスの原文は地の文として博士論文に組みこまれているが、実質的には彼が多様な情報源から探しだしてきた傍証のつづれ織りである。この部分でバージェス自身が書きこんでいる地の文はたいへん分量が少なく、事例の羅列により論旨を展開しようとする意図が読みとれる。以下、地の文と引用事例（かぎカッコ内）をあわせて提示する。

「賞賛に値する献身により、彼らは町や村のもっとも貧しくもっとも尊厳を奪われた人々のあいだでの活動に向かった。彼らのなかにカレッジを出た人は一人もなく、その説教者たちも不平も言わずに最もきびしい窮乏に耐えていた。世間は彼らをさげすみ、その説教や歌を聞いて、彼らを狂騒派 (Ranters) と呼んだ。それでも彼らは数を増やし、英国中を席卷してどこへでも浸透していった。……その支持者たちはほとんどすべて、漁師や、工場、炭鉱 (collieries)、鉱山で雇われた人々や、土地を耕す人々など、労働者階級であっ

た。……1808年の10人の会員が20万人に広がり、4000の礼拝所と16000人の地元の説教師を擁するまでになった。」(Brown 1898:146-47)。

労働者のあいだでの宗教運動の意義は、ウェスレーや彼に従う者が思いえがいていた厳格な宗教的効果だけに限られるものではなかった。また一団の人々が断酒や勤勉の習慣を獲得し、教区民に頼って暮らす度合いが少なくなっていく傾向が見られる、または多くの人が徐々に産業の不振の最低水準から上昇していくことができるようにしていったなどの事実、その主要な経済的な意味があるのでもない。特定の地域でのプリミティブ・メソディストたちの宗教運動の社会経済的意味についてはリチャード・ヒース氏が具体的に示している。「プリミティブ・メソディストの非国教会系連合教会 (United Free Church) は近隣で18の礼拝所を巡回しており、各礼拝所は個々の会衆 (congregation) により運営され、地元の説教師により司牧されている。二人の常任牧師 (regular ministers) が巡回教区全体を監督している。こうしたシステムのもとで、オックスフォードシャーの労働者たちは自己統治の技法について、いかにして自身で選んだ人々に忠実に従うかということについて、何事かを学んできた。そのことで指導者たちも、大いなる使命をいかに組織し、いかに担っていくかを教えられてきている。こうして彼らは一つの原理の究極の勝利についての確信をもつことを学び、こうして彼らは弱さのときと明らかな敗北のときを耐える力を身につけ、こうして繁栄のときに平静を保つようにもなってきたのである。」(Heath 1893:228-229) 「労働者たちのあいだの連合 [全国農業連合 (National Agricultural Union)] がキリスト教徒の指導のもとにあり、彼が自分の宗教的な群れのなかで何らかの仲間作り (fellowship) の習練をつんでいること、また労働者たちが自分の無知や無経験を感じながら、何も留保せずに指導者にしがっていることは幸福なことである。」(Heath 1893:228) 労働運動が、何かの意味でメソディストの群れの原理的な信仰に結びつけられていると、言いつのるつもりはわたしにはないが、個人の発達と指導者としての能力に対し、彼らが提供した機会が、労働運動の発端において重要だったということは確信している。9歳の頃からの貧しい農業労働者で、聖書や週刊新聞以外、知的な世界との接触がないジョセフ・アーチ (Joseph Arch) は、後世には、地元の説教師となり、彼は英国の農業労働者の連合運動の創始者かつ推進者となった (Heath 1893:232)。メソディストや非国教会の牧師は、初期の労働運動で顕著な役割を果たした。ジョセフ・R・ステイーブンス (Joseph R. Stephens) は工場立法の提唱者かつチャーティストとして祝福された (Webb & Webb [1894] 1911:287-288) が、彼もメソディストの説教師だった。労働者の組織での活動のために、7年間の移送の判決を受けた6人のドーセットシャーの労働者たちは、素朴な心をもったメソディストであり、そのうち2人は巡回説教師 (itinerant preachers) だった。1834年ロンドンでの抗議のための大行列は「馬上の非国教会教区牧師に率いられていた」(Seignobos [1899] 1907:50)。労働者の教会への参加の影響の程度は、労働者階級国民連合 (National Union of Working Class) が「メソディスト派 (Methodist connexion) の組織図をお手本とした組織」(J.A.H. 1893:178) だったという事実を示されている。したがって労働者階級の宗教運動は、より活発な道徳的知的発達に対する媒体となるだけでなく、組織された経済運動の指導者や活動のパターンも提供していた。(Burgess 1916:149-151)

メソディストの説教師の労働組合運動へのかかわりについての論述として、バージェスが参

照する各著者の態度には温度差があり、ヒースのようにメソディストの巡回牧師の政治的役割を高く評価する見解から、ウェッブ夫妻のように、他の集団それぞれの多様な労働運動組織や抗議活動、団体交渉などの記述に埋没してしまう程度に、さらっと触れているだけの記述まで多様である⁷。

概して社会学者の論証は他分野の著者の主張や説明を活用し、すでに定説と化している説明モデルに対する反例を提示することで、もとの主張を精緻化し、洗練することをめざす (Becker [1963] 1973=[1978] 1993; Glaser & Strauss 1967=1996)。それに対し、バージェスはここで各著者の片言隻語やたぶんに雰囲気的な記述を列挙して、自説を補強している。すなわちこの論述のスタイルは、定説が存在しないところで、新たな考え方を提示し、後続の研究者による展開を刺激しようとする開拓者的なものである。社会学が実証科学的な社会調査の営みを立ちあげて、思弁的な社会哲学から飛翔しようとした時期に、自分の関与したあらゆる分野で開拓者として研究方向を示唆し、後続研究者に指針を提示したバージェスが、生涯、保ちつづけた態度がここにも現れている。

こうしたバージェス自身の関心を深化させるためかどうかは不明であるが、彼が指導した牧師出身の社会学者ケネス・バーンハート⁸や、また教科書『家族』(Burgess & Locke [1945] 1953)や予測研究 (Burgess & Cottrell [1939] 1998; Burgess & Wallin 1953; Locke 1951)以降に共同研究者となったハービー・ロックが、メソディズムやキリスト教社会学に関する博士論文を残している (Barnhart 1924; Locke 1930)。しかし彼らの議論は、メソディストの開祖ウェスレーの伝記や、バプティストのソーシャル・ゴスペルの教義に集中している。国教会の牧師でもあったウェスレー自身は、とりあえず労働運動自体に全否定ではなかったようで、労働者階級への布教にも前向きではあったが、労使の対立を必然化する労働組合運動自体はキリスト教精神にそぐわず、争いを引きおこすものと捉えて否定的な態度を取っていた。したがって、バージェスが重視しているメソディストの説教師が指導した労働運動や労働者の相互扶助活動などは、彼らの視野には入っていない。歴史学でのメソディスト研究においても、20 世紀初期の段階では、労働組合運動と宗教活動は水と油のように相容れないものと捉える考え方が主流であった。

すなわち、ウェスレー本人は社会的に保守的かつ慎重な考え方をしていたものの、メソディストの運動が信者数を増やし、イギリスの社会で存在感を増していくなかで発生したいくつかのきっかけを通じて、中流の労働者が教養と政治的判断力を身につけ、政治的リーダーが輩出する土壌としてメソディストの運動が機能したということは確かにある。ただそうした歴史的論証は、19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけてメソディストの教会内で学習を深め社会的意識を高めて、自身が歴史家となったウェアマスのような著者によって、1930 年代にはじめて公表された (Wearmouth [1937] 1947=1994)。残念ながら、その頃にはバージェスたち自身の関心がイギリスの宗教史、政治史から離れてしまっており、この博士論文での主張を取りあげ直した文献は存在しない。

3. メソディズムから労働組合運動のリーダーが輩出するメカニズム

つづいて現在の知見を組み合わせ、メソディズムの創始者、ウェスレーの評伝とメソディストの一分派プリミティブ・メソディストの動向を説明できるよう、再構成を試みる。そして本来、特に労働者の権利を積極的に擁護しようとしたわけでもないウェスレーたちの宗教的行動が、無学文盲に近い労働者の教養や政治的判断力を高めていく土壌になった理由を考察する。

ウェスレーがおこなった宗教的革新のうち、労働組合運動リーダーの知的訓練に有利となった諸点は以下のようなものである。

1、野外集会 (field meeting, open meeting, camp meeting など)。ウェスレーの友人で初期の協力者であったジョージ・ホウィットフィールドは、カルヴァン派の立場を鮮明に表明する説教で熱狂的な人気を得ていたが、国教会では彼が教会で説教するのを禁じたので、野外での説教を開始した。そして教会がない炭鉱町などでも野外説教を実施した。国教会では教会外での説教を禁じていたが、ウェスレーも野外説教の手伝いに呼ばれ、それ以来、友人が宗教的情熱に駆られてはじめて布教の一便法を取り入れた。結局、彼らは生涯を各地の教会や野外での巡回説教の旅で過ごすこととなった。この実践により、国教会が対象とできていなかった労働者や農民への布教が可能となり、国教会の牧師が不在となっていた教会をはじめ、従来、教会がなかった地方にも信者を広げていく活力が生じ、18世紀に爆発的な信徒の増大をもたらした (野呂 1991:163-165)。そして国教会の牧師が派遣されず無牧になっている地方で、労働者階級を中心にメソディズムが普及した。19世紀において、メソディズムはイギリス国教会と並存し、それに次ぐ最大会派になった (野田 1997:169)。

2、独自の儀式と基準にもとづく新任牧師への按手礼。国教会では牧師叙任権を国王が握っており、各会派が独自に牧師を任命することを認めていなかった。ところが、ウェスレーがアメリカのジョージアに宣教旅行に出た際、国教会の牧師が現地で高慢な振る舞いのために反感をかい、全員本国へ送還されるという事態を迎えた。そして新任の牧師の頭に手を置き、宣教の務めを委ねる按手礼を施す権限を持つ牧師が一人もいなくなった。ウェスレーはカルヴァン主義の影響を受け、神を信じる一人一人が神を礼拝する司祭となりうるという万人司祭主義を奉じていた。当時の彼はカトリック的な儀式を重視する国教会の考えを捨てていたわけではなかったが、布教先での特殊な地域事情から国教会や国の許可もなく按手礼を受け、宣教の任に就かせた。さらにそのあとも、国教会の基準や儀式によらず優秀な信者を抜擢して按手礼を施すようになり、教会がないまたは牧師がいない地域で、貧しい労働者出身の優秀な人材を巡回牧師に登用する実践がこのことから生まれた (野呂 1991:198-200)。こうしてリクルートされた牧師のなかから、炭鉱町での相互扶助の呼びかけや雇用主との交渉に、指導的な役割を果たす巡回牧師が登場することになる。すなわち、ウェップ夫妻やヒースが著作で取りあげたメソディストの巡回牧師出身の労働組合組織者は、こうしたきっかけから現れたのである。ただしウェスレーは、カルヴァン主義の影響は受けているが、救済をめぐる予定説に関して、カルヴァン主義が陥りがちであった放縦な生活態度とは一線を画し、論争を繰りひろげた。すなわち、救済について神が運命をすでに決めてしまっているとすれば、救済を確信している人は、生活態度にかかわらず、たとえばどれほど多くの女性と関係をもとうと、また極端に言えば悪魔を崇拝しようとして、救済される運命は変わらないということになる (Semmel 1973:23-55)。こうした反律法主義 (antinomianism) に対し、ウェスレーの立場は救済に関する神人協力説と呼ばれ、現世での生活態度により神による救済の可能性が変化すると考えていた。この場合、この世で充実した生を過ごし、仲間たちと力をあわせて生活改善のために努力することで、神による救済の可能性が高まると考えることになる (野呂 1991)。こうしたカルヴァン主義の行きすぎた予定説解釈への修正が、労働組合の活動と宗教的实践を両立させる鍵となった。

3、組会 (くみかい, class meeting)。ボヘミヤのジョン・フスの教えを継ぎ、サクソニアの領主、ニコラウス・ツィンツェンドルフ伯爵の庇護と指導を受け、ヘルンフートの町を拠点とするモラヴィア兄弟団の牧師たちは、世界の貧しい人々のために積極的に熱心な伝道をおこ

なっていた。ウェスレーはアメリカのジョージアへ布教のため渡航する際、彼らと接する機会を得た。その実践を見習い、各地での集会を組織し、聖書について学びあう仕組みを形成したことがもう一つの革新である (Eayrs 1909: 281, 285-287)。

こうした3つの革新により、メソディストは貧しい労働者を信者として教化し、自分たちの学びの場を提供し、才能のある信者を抜擢して指導的な立場での発言する機会を与えた。さらに野外集会という実践は、労働組合の集会の母胎となり、労働組合が宗教的起源をもつことを如実に示す労働教会のような実践をも生み出した。

さらに、保守的で慎重なウェスレーの発想を超えて、巡回牧師が組合活動の指導をおこなうようになるには、もう一つの垣根を飛びこえねばならない。すなわち、4、ウェスレーやその後継者が形成する本流からの影響を部分的に遮断する傍流の隔絶された集団が形成されれば、牧師が柔軟に労働組合の社会的な事業にかかわっていけるようになるだろう。

1930年代後半に出たウェアマスの研究では、プリミティブ・メソディズムと呼ばれる分派の活動として、野外集会がおこなわれ、労働教会 (labor church) が組織されていたことが記述されている (Wearmouth [1937] 1947=1994)。これをメソディズムから労働組合運動の初期指導者が輩出するうえでの、4つ目の革新と捉えたい。

メソディズムと労働組合運動の関係を、組会による労働者の自己教育、相互教育の仕組みと合わせて解明したウェアマス自身、労働者階層出身のメソディストとして、自己教育により頭角を現し、50歳を過ぎて大学で歴史を学び歴史学者となった当事者である。そして、メソディズムのなかから労働組合運動の指導者や地域の政界に進出する人材が現れた理由は、組会という読書会により中流の労働者階級に属する会員が、相互に社会問題に関する資料に学び見識を深める機会が与えられたことである。また組会で頭角を現した人から説教者を養成する仕組みがあり、教会を通じて階層移動する経路も与えられていた (Wearmouth [1937] 1947=1994)。プリミティブ・メソディストという分派は、本流のメソディスト教会から禁止されたが、のちに改めて本流と和解合同している (Bevir 2011:278-297)。

バージェスの時点で、イギリス史に関してメソディストと労働運動の結びつきを指摘しえた理由は、以下のように推測できる。バージェスの祖父はバージェスの父をつれてイギリスからカナダに家族で移住している。バージェスは1886年生まれで、父と祖父一家がカナダに来たのは、おそらくその20年から30年前であり、ちょうどメソディストの運動が盛りあがっていた頃であろう。バージェス自身は組合教会員 (会衆派, congregationist) だが、メソディストと組合教会は発生系統上の親縁性がある (堀内 2010:6)。したがって、メソディストの巡回説教師が炭鉱での労働者の組織化、互助活動の立ちあげ、推進に功績があったという歴史的解釈をバージェスが強調している根拠は、おそらく家族や親しい人たちから受けついだ伝承だろう。そうした目で見ると、ウェップ夫妻の何気ない数行の記述をはじめとする複数の資料から読みとれる傍証が、彼の家族に伝承されたイギリスにおける宗教活動の情報を確認するものと思われ、博士論文のこの部分での論旨が形成されたのではないか。すなわちバージェスはこの点に関するイギリス史の定説が形成される以前に、自分自身の民族的、宗教的背景から得た信念を強調して博士論文に書きこんだのかもしれない。

シカゴ大学の社会学の教師たちの何人かは現役の牧師でもあり、バージェスのように父が牧師である者もいた。ある意味では、当時の社会学研究自体を、世俗化していく社会のなかで宗教的な知的資源により社会的地位を獲得してきた人々の子弟が、努力の方向を変えて自身の知的資源により社会的地位を確保しようとする地位政治 (status politics) の一部と、見なすこ

とができるかもしれない (Gusfield [1963] 1986)。一般に知識社会学的考察が成立しているのはロマン派時代の知識人についてである。コント以来、実証主義を標榜して学問を形成してきた社会学に知識社会学を試みようとしても、社会科学における「科学性」自体の知識社会学は、現代の科学的世界観自体の階級、階層的基盤をつきとめようとするのと同じ程度に困難な事業になる。現代社会学で扱いうる手がかりの一つとして、各社会学者の宗教的ルーツの考察に取りくむという研究指針も有効だろう。

4、労働組合運動からフェビアンイズムへ——ウェッブ夫妻とバージェスのロシア研究

労働組合運動から生みだされた諸要求をフェビアニストたちが検討して、政策を整理した結果、イギリスではマルクスとエンゲルスが予言した資本主義から社会主義へと移行する革命が生じるかわりに、労働者の生活改善を中心とした国民全体の福祉医療政策が整備され、福祉国家への道が開かれた⁹。すなわち福祉国家は、国や社会に政治的混乱をもたらした大量虐殺や独裁を余儀なくさせた革命を避けつつ、社会主義として提唱された労働者や国民の生活改善の政策を実現していく方策であろう。

現代のフェビアン協会の主張によれば、1942年のビヴァリッジ報告などに結びつく形で、イギリスの救貧法の実践形態を整理し、新たな福祉政策立案の源泉となったのはウェッブ夫妻の調査である。

夫妻の共同による初期の著作では片鱗が示されているに過ぎない政策提言は、フェビアニストのパンフレットを通じて、つぎつぎに提唱され、実現されていった。たとえば『産業民主制論』『大英社会主義コモンウェルスの構成』でも、国民的最低限の概念が提示されている (Webb & Webb [1897] 1902:766-784=[1927] 1969:937-960; 1920:320-323=1948:336-338)。具体的には、主に最低賃金の保証、法定労働時間の制定を指す。これは先行する『労働組合運動史』調査 (Webb & Webb [1894] 1947=1973) から抽出した論点のうち、全国民に適用されるべき基本法の構成要素と見なされたものである。こうした事柄以外に各職種の労働組合が勝ち取るべき諸条件は、全国民に適用される法律によるのではなく、各労働分野における労使の団体交渉によって獲得すべきだと夫妻は考えている (Webb & Webb [1897] 1902:796-806=[1927] 1969:975-988)。すなわちウェッブ夫妻の政治的提言では、労働組合に関する施策を中心に、国民全体にかかわる部分は法律による変革を目ざし、労働者への施策を障害者や高齢者など、社会的弱者を含む国民全体を包含するものへと拡大する福祉国家化の提唱も、当初は国民的最低限などの労働組合についての提言に含まれていた。

こうした独自の調査から抽出された主張は、1906年の最低賃金制の導入、1911年の国民保健サービス (National Health Service) の創設、1917年の世襲貴族 (hereditary peers) の廃止などとして、フェビアン協会のパンフレットで具体的に提唱されていった。こうした歩みの一步一步によりフェビアン協会はウィリアム・ビヴァレッジやロイド・ジョージらとともに近代福祉国家の創設者というべきであると、インターネットに掲載されたHPでも主張されている¹⁰。

ウェッブ夫妻をはじめとするフェビアンたちは、「手勢を持たない情報将校 (intelligent officers without the army)」(Coser 1965:171=1970:188; Trevelyan 1922:403) として、歴史的社会的データの調査にもとづく政策提言と、社交活動による政治的、経済的有力者の説得を通じてこうした社会改革を実現していった。他方、土地の私的所有を禁じるなどの強い表現を取り、私有財産を国有化したのちに社会的共有物として社会化することを目指した革命後のロシ

アの政界は、プロレタリア独裁から党の、そして政治的最高権力者による個人的独裁に川の流れのように打ちよせられていき、既存勢力からの猛烈な抵抗を「党の粛清 (party cleansing)」と呼ぶ虐殺によって殲滅していった (志水 1977)。イギリスではウェップ夫妻らの流儀で、革命も粛清もなしに社会主義的な政策が福祉国家の創出として実現していったのだが、言論を尽くした地道な説得により徐々にしか進行しない社会改革の歩みと比較して、ロマノフ王朝の帝政を倒してプロレタリアが政権を掌握し、一気にうえからの改革を進めていったロシアという国に対するあこがれの感情が、夫婦に共有された模様である¹¹。

そうした気持ちから晩年のウェップ夫妻は、革命後、スターリン体制下のロシアの社会制度を調査し、1920年代から1930年代にかけて起こった社会変動を薔薇色に美化した報告書『ソヴィエト・コミュニズム』(Webb & Webb 1936=1952-1953)を著した。集団農場化に抵抗するウクライナの富農層が、没収された土地の農作物の破壊をおこなった場合に、犯人を捕らえて処刑するなどの行為は現在の目から見ると、数百万人規模の政治的迫害や虐殺に該当するものとされる。しかしウェップ夫妻はこうした処刑を粛清として、工場で親戚のために不正に休暇を多く取らせ、情実人事により私腹を肥やした職長の党籍剥奪や追放などとあわせ、あくまでも牧歌的に描きだしている (Webb & Webb 1936:258-272, 376-392=1952-53:2 巻, 94-112, 241-260)。スターリン指導下のロシア共産党からの一方的な情報提供を、疑うことなく鵜呑みにして執筆されたようなこの報告書は、1953年のスターリンの死去、また1956年の党大会でフルシチョフによりおこなわれたスターリン批判以後、当然のことながら急速に評判を落とし、「福祉国家の創設者」というウェップ夫妻の輝かしい経歴の汚点となった。ウェップ夫妻をはじめとするフェビアンたちがアメリカ社会および社会学におよぼした影響は、ジェーン・アダムズ率いるハルハウス関係者、シカゴ大学の社会学、社会福祉研究者を中心に計りしれないものがある (Deegan 1988:263-266)。しかし、日本でもアメリカでもその声望は第二次世界大戦後には退潮していく。それは彼らのスターリニズム解釈の誤りによるものだろう¹²。

バージェスは『家族』初版では、『ソヴィエト・コミュニズム』を引用してロシアの女性に関する法律の情報源としているが、スターリン批判後に出た第3、4版は、その部分は別のロシア研究書に差しかえられた¹³ (Burgess & Locke [1945] 1953:194; Burgess et al. 1963:112, 1971:142)。日本では大原社会問題研究所で進められていた翻訳出版が中絶している。

ロシア社会への関心を示すものとして、バージェスは『家族』でロシア家族の項目を設け (Burgess & Locke [1945] 1953:180-206; Burgess et al. 1963:99-124, 1971:130-155)、またソヴィエト・ロシアでの非行問題対策についての1936年の学会発表を1937年に公刊した (Berman & Burgess 1937)。こうした関心は、博士論文でイギリスの労働運動についての情報源として活用したウェップ夫妻の著書に、導かれてのことであろうと推測できるし、現状ではそうした推論を排除する根拠は見つけにくい¹⁴。しかし、バージェス自身はウェップ夫妻の手放しのロシアの政治改革の礼賛を共有していたとは思われず、革命後のロシアについての批判的な見方を培っていた。

そもそも教科書『家族』のもともとの構想は以下のようなものである。まずアメリカにおけるアフリカ系家族には、アフリカでの奴隷狩りやアメリカでの奴隷売買、自分自身を買いもどす経済力を身につけなければ自由人になれない奴隷労働の仕組みのため、アフリカでの部族単位の家族制度を破壊され、コミュニティで共有される文化を奪われていた。そのことと類比的に対照させる素材として、うえから政治的に強要される法的な改革により、共産主義的、社会主義的な家族制度が施行されることになったロシアの考察が意図されていた。すなわちバー

ジェス自身は、ロシアの家族とアフリカ系家族の研究を合わせて、アメリカの中産階級以上の家族制度と対比させる素材としていた。

バージェスは、おそらくウェップ夫妻の論調には懐疑的で距離をとった立場から、独自にロシア研究に着手し、1930年の夏、ロシア農村でのコミューンの現地視察による報告文を『家族』で引用している (Burgess & Locke [1941] 1953:192-193; Burgess et al. 1963:110-112, 1971:141-142)。

こうしてロシアについての資料を集め、ロシアを訪問し、アメリカとロシアの友好協会の役員になるといった行動から、第二次世界大戦後、米ソ冷戦が始まった赤狩り時代には、共産党の党员疑惑、共産党シンパだという風評が広まったようだ。バージェス自身のロシア家族やロシアでの非行政策についてのデータを客観的で、是々非々の立場で冷静に評価していこうとする態度を、ウェップ夫妻の手放しのソヴィエト・コミニズム礼賛と比較すると、バージェスの後半生の悩みのタネとなったFBIの嫌疑は皮肉である。彼は10年にわたって繰り返し身辺調査を受け、公聴会で諮問もされている。マイク・キーンは情報公開法にもとづく資料請求という手段で、その際のファイルを検討した (Keen 1999:33-53)。

キーンが言及している社会学者は11人いる。すなわち、ロシアの亡命貴族であったピティリム・ソローキンをはじめ、シカゴ大学関係者ではバージェス以外に、ハーバート・ブルーマー、エドウィン・サザランド、サミュエル・ストゥファール、ウィリアム・オグバーン、アフリカ系社会学者のエドワード・フレイジャーなどが捜査対象となった。他には晩年、共産黨員になったアフリカ系社会学者、W・E・B・デュボイス、また晩年、社会主義国キューバについての著作を発表したC・ライト・ミルズ、タルコット・パーソンズ¹⁵、社会学者の社会運動への参加を唱えたロバート・リンドラの事例も考察されている。

以下、バージェスに関する記述をやや詳しくまとめておく。

『家族』のロシア家族に関する章 (Burgess & Locke [1945] 1953:180-206; Burgess et al. 1963:99-124, 1971:130-55) などから読み取れるロシア家族への関心について、1943年以降、連邦政府の審議会などに雇用される際の被用者調査 (Employee Investigation) (1943年9月6日から1944年4月19日まで)、忠誠調査 (Loyalty Investigation) (1950年2月21日から7月19日まで)、2回の国家公安調査 (Internal Security Investigation) (1946年8月5日から1947年7月21日までと、1950年8月から1951年2月28日まで) を受けている。他にも断続的に、1956年3月のブルーマーの忠誠調査における情報提供についての協力を要請される時点まで、バージェスは地域委員会に召喚され証言を求められ、身辺の調査を受けてもいる。そこでは共産党の覆面組織とされる全国米ソ友好振興会 (National Council of American Soviet Friendship)、シカゴ米ソ友好振興会 (Chicago Council of American Soviet Friendship) などと彼のかかわりが、反米的活動をめぐる捜査線上に浮かび、そのつど、証拠が見いだされないとして捜査が終了している (Keen 1999:33-53)。

結び、19世紀政治、宗教思想の再検討

最後に、ややマクロに19世紀当時の政治、思想情勢を鳥瞰する視点を導入して結びとする。

本論でとりあげたメソディズムや、その一分派であるプリミティブ・メソディズムが母胎の一部となり、発生した初期の労働組合運動の展開は、もちろん、その他のアメリカにおけるキリスト教の最大会派となったバプティストの動向も加味しつつ、さらに掘り下げて検討する価値がある。このことを確認し今後の社会学説史、社会政治史の重要な研究課題の一つとして提

案したい。

メソディストの野外集会での伝道の試みが労働運動と結びつき、労働教会という形で、社会問題、労働問題に関する問題提起を行い、デモやストライキの母体となるなどの形で社会的影響力も行使した。こうした宗教的なルーツをもつ労働組合運動は倫理的社会主義 (ethical socialism) と名づけられ、イギリス特有の社会的風土の一部として再評価されている。

すなわち、イギリスの社会思想の大きな歴史潮流として、19 世紀半ばにダーウィンの進化論や、スペンサーの社会進化論に衝撃を受けたキリスト教信仰が、倫理的社会主義へと変容したと考えるのである。神が天地を創造したとする聖書の説明の信憑性が消え、聖書の一字一句にこだわる原理主義者以外には、キリスト教に与えられてきた倫理的な心の支えをリニューアルしていく必要が生じ、倫理的社会主義が登場した。その一部が、イギリスにおける労働組合運動や、エリート主義的で帝国主義的でもあるフェビアニズムの社会主義思想に展開した (Bevir 2011)。ビアトリクスとシドニーのウェップ夫妻は、政治の有力者との姻戚関係や個人的な友人関係を通じて、サロンでの社交を展開し、労働組合運動の研究から抽出した自分たちの社会主義的な政策を提唱し、イギリスを福祉国家に導いた。結果として、既成の社会的勢力間の調整により、労働者保護の法律がつぎつぎと制定される形になり、イギリスで発生した市民社会論の伝統 (鎌田 2015) を守った社会改革が成功し、第二次世界大戦後のイギリスは福祉社会への道をたどり、バージェスの用語をあえてもちいるなら「社会化」された。

フェビアニズムやレフ・トルストイの共同体志向がアメリカに輸入され、ハルハウスのようなセトルメントで普及された。社会主義の思想的源泉は、前稿で述べたようにサン・シモン死後のサン・シモン派 (鎌田 2015:6) であり、1830 年代にはドーバー海峡を挟んで一種の社会主義ブームが生じたとされている。その後、ブームは沈静するが、実際の労働争議が頻発するなかで 1880 年代にはブームが再燃し、フェビアニズムが台頭する。19 世紀の半ばにはマルクスとエンゲルスが『共産党宣言』(Marx & Engels [1848] 2008=1971) を公刊しており、マルクス主義の政治運動も台頭しつつあったが、フェビアンたちは暴力を肯定する革命志向のマルクス主義には反感を持っており、独自の政治的主張として老齢、傷病年金や最低生活保障という面での社会主義的政策を提言しつづけ、最終的には福祉国家政策として民主的、資本主義的な社会体制のすべてで標榜される労働者、傷病者、高齢者などを国家が支援する政策体系を形成した。ドイツではもともとマルクス主義者とは一線を画した講壇社会主義者が、いち早く労働者支援の政策を提唱し実現させはじめていた。アメリカでは社会保障法を成立させ、第二次世界大戦後には GHQ の占領下の日本にも導入されたその政策は、いわば世界基準化した社会主義政策である。

フェビアンたちの社会主義はすでに述べたメソディストの宗教的心情を母胎とする労働組合運動をはじめ、倫理的、情緒的な背景を持った倫理的社会主義に属し、同様に倫理的無政府主義、労働教会などの同時代の運動と並立するものであった。ハルハウスなどのセトルメントを通じてアメリカに移入された社会主義も、むしろフェビアン協会の福祉国家論的な政策パッケージを輸入し、アメリカ化して定着させようとするものであり、そうした志向はシカゴ大学の社会学者らとも共有されていた。このような経緯で、フェビアン協会の社会主義政策は、冷戦時代以降の西側世界に共有された政策パッケージの母胎となり、東側世界もある程度までそれに追随したといえるだろう (レーニン 1975)。

注

- 1 本文中の書名表記は新字体をもちい現代風に改めた。
- 2 ウェップ夫妻の経歴や業績に関する一般的な参考書として、名古（2005）を参照。
- 3 このうちバージェスが博士論文で参照しているのは、『労働組合運動史』『産業民主制論』（Webb & Webb [1894] 1911=1973, [1897] 1902=[1927] 1969）のみである。公共社会学の立場からは、ウェップ夫妻の翻訳の多くにかかわった大原社会問題研究所長の高野岩三郎を通じて、彼らの著作はGHQの提示した日本国憲法案にもかかわりがあると考えられる。それゆえ、ここではウェップ夫妻の膨大な著作のうち日本で翻訳紹介された文献を抜粋した。
- 4 メソディズムの評価に関するこうした論争を整理し、メソディズムの発生と展開をイギリスの近代化において生じた革命として捉えたのがバーナード・センメル（Semmel 1973）である。
- 5 本論ではバージェスによる参照指示は、原典と見比べたうえで現代風に改めて提示した。バージェスが依拠した文献はすべてインターネット上のアーカイブとしてデータ化され公開されている。参考文献リストに、PDFやfull textなど各種のデータをダウンロードできるサイトのアドレスを併載する。
- 6 ここで参照されている *The Dictionary of National Biography* も初版から起こしたデータが全巻分、インターネット上のアーカイブで公開されている。現在、各大学図書館などで容易に手にとることができるのは、1917年以降に再版されたOxford University Press版だが、ネットでアクセスできる利便性を評価して、ネット上で各種初版データにアクセスできるサイトのアドレスを併載しておく。この本の各項の著者はアルファベットの略記で示されるが、その略記自体を著者名と見なし、現代風に参考文献リストを再構成した。
またバージェスは、ここで以下のような数量的なデータを歴史書から引用している。「推定では、1700年には英国人のわずか20分の1だった非国教会員が1800年には優に5分の1に達し、1900年には明らかに半数に達している。非国教会（Free churches）に対する統計は、2178211人であり、英国国教会の培餐会員（communicants）は2053455人である、ただし後者の影響力と権力はその会員数よりも大きな割合を占めている。礼拝所の登録数の統計はウェスレー派の刺激を受けた非主流派の信仰復興の程度の大きさを指ししめしている。1731年から1740年までの10年間で、新規の登録数はわずかに448ヶ所であったが、1791年から1800年までは4394ヶ所増え、1801年から1810年までには5460ヶ所増えた。さらに1811年から1829年まででは、10161ヶ所増えた」（Burgess 1916:149, ただしn.39も本文に繰り返しいて再構成；Beazley 1898:403; Whittaker 1898:240）。
- 7 ここでバージェスが、労働問題に関する権威としてウェップ夫妻の著作を引用していることには注目する。ウェップ夫妻自体は無神論なので特に組合運動家の宗教的背景を強調してはいない。ただしピアトリス・ウェップは、おじのスペンサーの指導を受けていた少女時代から、宗教的感情をめぐる葛藤を日記に書きのこしており、宗教活動の評価について彼女はアンビヴァレントな気持ちを持っていた（名古 2005:13-43）。
- 8 バーンハートの経歴や自伝的証言についてはHenking（1992）を参照。
- 9 アングロサクソン系の社会で福祉国家と呼ぶものを、ドイツ語では社会国家と呼ぶ（岸川 2011）。これはフェビアニズムの提言を受け、福祉的政策の実現を通じて、社会主義を現実政治に導入したグスタフ・シュモラーのような講壇社会主義者の活動の影響が、継承されたものであろう（Schmoller 1915）。
- 10 "The Fabian Society: brief history," (<http://www.theguardian.com/politics/2001/aug/13/thinktanks.uk>. 2015年12月9日閲覧. 公式HPの一部)
- 11 改革に関する効率を重視する観点からロシア・コミニズムに惹かれていく心情（制度信仰）は、もともと効率を重んじる官僚から政治家に転身したシドニーについて、より強く指摘できることだと思われる（名古 2005:318, n.87）。
- 12 1956年のロシア共産党大会でのフルシチョフのスターリン批判の演説は、元来、スターリンの部下として

頭角を現してきたフルシチョフが、スターリン体制における序列が自分より上であった同僚を追いおとす政治的立場逆転の儀式として実行された。したがってフルシチョフ自身も関与した革命初期の集合農場経営にともなう虐殺事件ではなく、党内での粛清事件のみが断罪されている。当初、党大会に出席した人以外には公表されなかった秘密報告の内容がさまざまな経路でリークされ、周知されていくにつれて、スターリン時代の多様な虐殺や政治的迫害の行為が確認され、スターリン独裁体制が決して薔薇色のユートピアではないことが知られていった（フルシチョフ 1959=1977; 志水 1977）。

- 13 引用されているのは『ソヴィエト・コミュニズム』の 1937 年第二版以降に収録された 1936 年憲法の 122 条。バージェスが参照しているのは 1941 年版, 528 (22)。邦訳では 1 巻付録, 16 参照。
- 14 ただしウェップ夫妻以外にも、英米の多くの知識人がロシアに招かれ、そこに自身の思想の格好の聴衆を見いだしたとされる。したがってウェップ夫妻の著作以外にも、そうした知識人たちのソビエト・ロシア訪問についての情報が、当時のバージェスに知的な刺激を与えたということは十分考えられる（Coser 1965:233-241=1970:257-266）。
- 15 パーソンズは著作からも保守的な思想が窺えるので FBI の捜査を受けたことは意外であるが、『アメリカ兵』（Stouffer et al. [1949] 1977, [1947] 1977a）プロジェクトの中心人物としてゆるぎない愛国心を表明しながら、のちにアメリカ人の共産主義への態度を研究して捜査対象となったストウファァーとの同僚関係から、捜査線上にあがったと考えられる（Keen 1999:123-141, 155-169, Stouffer 1955）。

参考文献

- A.G., 1900, "Whitefield, George," Lee 1900:85-92.
- Barnhart, Kenneth Edwin, 1924, "The Evolution of the Social Consciousness in Methodism," Unpublished PhD. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago.
- Beazley, C. Raymond, 1898, "The Established Church," Traill 1898:403-413.
- Becker, Howard S., [1963] 1973, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, 2nd ed. New York: Free Press. (= [1978] 1993. 村上直之訳, 『アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか 新装版』新泉社.)
- Berman, Nathan and Burgess, Ernest W. 1937. "The Development of Criminological Research in the Soviet Union," *American Sociological Review*, 2:213-222.
- Bevir, Mark, 2011, *The Making of British Socialism*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Brown, John, 1898, "The Free Churches, 1815-1854," Traill, H.D. (ed.), 1898, *Social England: A Record of the Progress of the People*. V.6 (*From the Battle of Waterloo to the General Election of 1885*), New York: G.P. Putnam's Sons. (<https://archive.org/details/cu31924087991109>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- Burgess, Ernest W., 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press. (<https://archive.org/details/functionsociali02burggoog>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- Burgess, Ernest W. and Leonard S. Cottrell, Jr., [1939] 1998, *Predicting Success or Failure in Marriage*, London: Routledge/Thoemmes.
- Burgess, Ernest W. and Harvey J. Locke, [1945] 1953, *The Family: From Institution to Companionship*, 2nd ed., New York: American Book Company.
- Burgess, Ernest W. and Paul Wallin, 1953, *Engagement and Marriage*, Chicago: J.B. Lippincott.
- Burgess, Ernest W., Harvey J. Locke and Mary Margaret Thomes, 1963, *The Family: From Institution to Companionship*, 3rd ed. New York: American Book Company.
- , ———, ——— 1971, *The Family: From Traditional to Companionship*, 4th ed., New York: Van Nostrand Reinhold.

- Cole, G.D.H., [1931] 1937, "Fabianism," in Seligman, Erwin R.A. (Ed.), *Encyclopaedia of the Social Sciences*. V. 6, London: Macmillan.
- Coser, Lewis, 1965, *Men of Ideas: A Sociologist's View*, New York: Free Press. (=1970, 高橋徹監訳, 『知識人と社会』培風館.)
- Deegan, Mary Jo. 1988. *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*. New Brunswick, New Jersey: Transaction.
- Eayrs, George, 1909, "Developments, Institutions, Helpers, Opposition," W. J. Townsend, H. B. Workman and George Eayrs, eds., *A New History of Methodism*, V. 1, London: Hodder and Stoughton, 227-331. (<https://archive.org/details/newhistoryofmeth01town>. 2015 年 12 月 9 日閲覧.)
- Glazer, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine de Gruyter. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Gusfield, Joseph R., [1963] 1986, *Symbolic Crusade: Status Politics and the American Temperance Movement*, 2nd ed., Urbana, Ill.: University of Illinois Press.
- Heath, Richard, 1893, *The English Peasant. Studies: historical, local, and biographic*, London: T. Fisher Unwin. (<https://archive.org/details/englishpeasantst00heatiala>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- Henking, Susan E., 1992, "Protestant Religious Experience and the Rise of American Sociology: Evidence from the Bernard Papers," *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 29:325-339.
- 堀内一史, 2010, 『アメリカと宗教——保守化と政治家のゆくえ』中央公論新社.
- J.A.H., 1893, "Lovett, William, Sidney Lee, ed.," *The Dictionary of National Biography*, V.34, New York: Macmillan, 178-180. (<https://archive.org/details/dictionaryofnationalbiography>. 2016 年 1 月 19 日閲覧.)
- 鎌田大資, 2015, 「市民社会, 人権, 公共圏の学としての社会学——英仏革命期における二つの思想潮流」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 42:1-12.
- 2016, 「形成期のアーネスト・バージェスを解読する——序説」『椋山女学園大学研究論集』47(社会科学篇): 1-15.
- Keen, Mike Forrest, 1999, *Stalking Sociologists: J. Edgar Hoover's FBI Surveillance of American Sociology*, Westport, CT: Greenwood.
- フルシチョフ, ニキータ・セルゲーエヴィチ (Хрущёв, Ники́та Серге́евич. Khrushche, Nikita Sergeevich), 1959, Доклад на закрытом заседании XX съезда КПСС, Москва: Госполитиздат. (<http://web.archive.org/DokladNaZakrytomZasedaniiXxSezdaKpssOKulteLichnostilEgo>. 2015 年 12 月 9 日閲覧.) (=1977, 志水速雄訳, 『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」』講談社.)
- 岸川富士夫, 2011, 「J. ハーバーマスの思想における社会国家」『愛知大学経済論集』186: 115-142.
- Lee, Sidney (ed.), 1900, *The Dictionary of National Biography*, V.61, New York: Macmillan. (<https://archive.org/details/dictionaryofnationalbiography>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- レーニン, ウラジーミル・イリイチ, (Ле́нин, Влади́мир Ильи́ч. Lenin, Vladimir Ilyich) (副島種典編訳), 1975, 『労働者統制・国有化論』大月書店.
- Locke, Harvey James. 1930. "A History and Critical Interpretation of the Social Gospel of Northern Baptists in the United States." PhD. dissertation, Department of Christian Theology and Ethics, University of Chicago.
- 1951, *Predicting Adjustment in Marriage: A Comparison of a Divorced and a Happily Married Group*, New York: Henry Holt.

- L.S., 1894, "More, Hannah," Leslie Stephen, ed., 1894, *The Dictionary of National Biography*, V.38, New York: Macmillan, 861-867. (<https://archive.org/details/dictionaryofnati38stepuoft>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- 1900, "Wilberforce, William," Lee 1900:208-217.
- Marx, Karl and Friedrich Engels, [1848] 2008, *Manifest der Kommunistischen Partei*, Meta Libri. (http://www.ibiblio.org/ml/libri/e/EngelsFMarxKH_ManifestKommunistischen_p.pdf. 2015 年 12 月 9 日閲覧.) (=1971, 大内兵衛・向坂逸郎訳, 『共産党宣言』岩波書店.)
- 名古忠行, 2005, 『ウェッブ夫妻の生涯と思想——イギリス社会民主主義の源流』法律文化社.
- 野田宣雄, 1997, 『ドイツ教養市民層の歴史』講談社.
- 野呂芳男, 1991, 『ウェスレー』清水書院.
- Potter, Beatrice, 1891, *The Co-operative Movement in Great Britain*, S. Sonnenschein. (=1921, 久留間鮫造訳, 『消費組合發達史論：英國協同組合運動』同人社書店.)
- Rogers, James E. Throrold, 1888, *The Economic Interpretation of History*, New York: G.P. Putnam's Sons. (<https://ia601406.us.archive.org/details/economicinterpre00rogeuoft>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- Schmoller, Gustav Friedrich (trans., A.W.S.), 1915, "Schmoller on Class Conflicts in General," *American Journal of Sociology*, 20:504-531.
- Seignobos, Charles (trans., S.M. MacVane), [1899] 1907, *Political History of Europe since 1814*, New York: Henry Holt. (<https://archive.org/details/cu31924027804537>. 2015 年 12 月 9 日閲覧)
- Semmel, Bernard, 1973, *The Methodist Revolution*, New York: Basic Books.
- Shaw, Bernard and Gaylord Wilshire (eds.), [1889] 1891, *Fabian Essays in Socialism*, New York: Humboldt. (<https://archive.org/details/fabianessaysinso00fabirich>. 2015 年 12 月 9 日閲覧.)
- 志水速雄, 1977, 「解説——フルシチョフ秘密報告の背景と評価」フルシチョフ 1977:146-204.
- Stouffer, Samuel A., 1955, *Communism, Conformity, and Civil Liberties: A Cross-Section of the Nation Speaks Its Mind*, Garden City, New York: Doubleday.
- Stouffer, Samuel A., Edward A. Suchman, Leland C. DeVinney, Shirley A. Star and Robin M. Williams, Jr., [1949] 1977, *The American Soldier: Adjustment during Army Life* (V.1), Manhattan, Kan.: Military Affairs/Aerospace Historian Pub., Sunflower University Press.
- Stouffer, Samuel A., Arthur A. Lumsdaine, Marion Harper Lumsdaine, Robin M. Williams, Jr., M. Brewster Smith, Irving L. Janis, Shirley A. Star and Leonard S. Cottrell, Jr., [1947] 1977a, *The American Soldier: Combat and Its Aftermath* (V.2), Manhattan, Kan.: Military Affairs/Aerospace Historian Pub., Sunflower University Press.
- Traill, H.D. (ed.), 1898, *Social England: A Record of the Progress of the People*. V.5 (*From the Accession of George I to the Battle of Waterloo*), New York: G.P. Putnam's Sons. (<https://archive.org/details/cu31924087991091>. 2015 年 12 月 9 日閲覧.)
- Trevelyan, G.M., 1922, *British History in the Nineteenth Century*. London: Longmans, Green. (<https://archive.org/details/BritishHistoryInTheNineteenthCentury>. 2015 年 12 月 9 日)
- Wearmouth, Robert F., [1937] 1947, *Methodism and the Working-Class Movements of England 1800-1850*, 2nd Ed., London: Epworth Press. (=1994, 岸田紀・松塚俊三・中村洋子訳, 『宗教と労働者階級——メソジズムとイギリス労働者階級運動 1800 - 1850』新教出版社.)
- Webb, Sidney and Beatrice Webb, [1897] 1902, *Industrial Democracy*, London: Longmans, Green. (<https://archive.org/details/industrialdemocr02webbuoft>. 2015 年 12 月 9 日閲覧.) (= [1927] 1969, 高野岩三郎監訳, 『産業民主制論』法政大学出版局. 底本は 1920 年版)

- , ——— [1894] 1911, *The History of Trade Unionism*, New ed., London: Longmans, Green. (<https://archive.org/details/historyoftradeun00webb>. 2015 年 12 月 9 日 閲覧.) (=1973, 荒畑寒村監訳・飯田鼎・高橋洸訳, 『労働組合運動の歴史』上下巻, 日本労働研究機構. 底本は 1920 年版)
- , ——— 1911a, *The Prevention of Destitution*, London: Longmans, Green. (=1914, 大日本文明協會編, 『國民共済策』大日本文明協會. 1919 年に『防貧策』と改題)
- , ——— 1920, *A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain*, London: Longmans, Green. (<https://archive.org/details/constitutionfors00webbuoft>. 2015 年 12 月 9 日 閲覧.) (=1979, 岡本秀昭訳, 『大英社会主義社会の構成』新版, 木鐸社.)
- , ——— 1921, *The Consumer's Co-operative Movement*, London: Longmans, Green. (= 山村 喬 訳, 1925, 『消費組合運動』同人社書店.)
- , ——— 1936, *Soviet Communism: A New Civilization*, London: Longmans, Green and Co. (<https://archive.org/details/sovietcommunismn02webb>. 2015 年 12 月 9 日 閲覧.) (=1952-53, 木村定・立木康男訳, 『ソヴェト・コンミュニズム—新しき文明』2 巻 憲法 (一), (二), みすず書房. 翻訳は中断.)
- , ——— 1936a, *Is Soviet Communism a New Civilisation?* (Left Review Pamphlet), London: Left Review. (=1946, 川村静子訳, 「ソヴィエト共産主義は新しい文化なりや」『ソ聯とは何ぞや』世界文学社, 1-41.
- , ——— 1936b, *Soviet Communism: Dictatorship or Democracy?* (Left Review Pamphlet), London: Left Review. (=1946, 川村静子訳, 「ソヴィエト共産主義は獨裁か民主制か」『ソ聯とは何ぞや』世界文学社, 43-102.
- , ——— [1923] 1970, *The Decay of Capitalist Civilization*, Freeport, N.Y.: Books for Libraries Press. (=1928, 安部磯雄ほか訳, 「資本主義文明の崩壊」, 『資本主義文明の崩壊; 大英社会主義國の構成; 消費組合の將來』(社会思想全集 第 34 巻), 平凡社.)
- , ——— [1932] 1975 (intro., T.H. Marshall), *Methods of Social Study*, London: London School of Economics and Political Science. (=1982, 川喜多喬訳, 『社会調査の方法』東京大学出版会.)
- Whittaker, T., 1898, "Philosophy," Traill 1898:240-245.